

イエス様の思いに合わせられ

[マタイによる福音書 9章 35～10章 15節]

イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に関心なさい。」イエスは十二人の弟子を呼び寄せ、汚れた霊に対する権能をお授けになった。汚れた霊を追い出し、あらゆる病気や患いをいやすためであった。十二使徒の名は次のとおりである。まずペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、フィリポとバルトロマイ、トマスと徴税人のマタイ、アルファイの子ヤコブとタダイ、熱心党のシモン、それにイエスを裏切ったイスカリオテのユダである。イエスはこの十二人を派遣するにあたり、次のように命じられた。「異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人の町に入ってはならない。むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい。行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である。町や村に入ったら、そこで、ふさわしい人はだれかをよく調べ、旅立つときまで、その人のもとにとどまりなさい。その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる。あなたがたを迎え入れもせず、あなたがたの言葉に耳を傾けようもしない者がいたら、その家や町を出て行くとき、足の埃を払い落としなさい。はっきり言うておく。裁きの日には、この町よりもソドムやゴモラの地の方が軽い罰で済む。」

[1] 主イエスの伝道は失敗だった？

よく、「イエス・キリストの伝道というのは結局失敗だった」と言う人々がいます。イエス・キリストは心に響く良い言葉もたくさん語られたけれども、最後は人々から受け入れられずに無残にも殺されてしまったのではないかと、という訳ですね。「理想主義では生きていけない。現実には甘くない」ということなのでしょう。けれども、伝道とかイエス様を信じて生きるということは、そのような、

イエス様を理想の教師として仰いで生きるということなのではないでしょうか？ そうすると、信仰というのは「道徳」と殆ど変わりがないものになってしまいます。信仰に生きるとはそういうことではないでしょう。今日の聖書の箇所では、その「信仰に生きる」とはどういうことなのかを教えてくれていると思います。

[2] 私たちを遣わされる主

今日は9章35節から10章の前半を読みましたが、ここからマタイ福音書は新しい段階に入っています。この直前までは山を降りたイエス様が沢山の奇跡の業を現わされたということが次から次に記されています(8章から数えると11の奇跡の業)。この後はそれほど多くの奇跡はなく、むしろ10章からは弟子の派遣という出来事が始まっています。これは新しいことです。ただイエス様ももちろん働かれておりまして、まあ、弟子たちはイエス様の下で実地訓練を受け始めた、というようにも言えるでしょうか。

ここで弟子たちがしたことというのは、私たちが「伝道」ということをイメージするようなこととは少し違うような気がします。伝道と言うと、例えば使徒言行録に記されているような事柄を私たちはすぐに思い浮べると思います。言葉による説教とか、続々と信じる者が与えられ、その群れが大きくなっていくことなどをです。しかし今日の所は、弟子による力ある宣教とかそのようなことは無いのです。あるとすれば、主の「**イスラエルの失われた羊の所へ行って『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい**」ということ位です。つまり、神様を見失ってしまっている神様の民に、あなた方は捨てられていない、御国は来るのだから心の帯をしっかり締めなさい」ということだと思います。とてもシンプルなことです。この「シンプルさ」というのが、イエス様の弟子として生きる特徴のように私は思うのですね。シンプルであること。これは主からのチャレンジだと思います。

弟子たちがここでイエス様から遣わされてしていることは何かと言えば、イエス様のように、理屈ではなく単純に**人を愛すること**だと思います。8節に「**病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。**」とありますが、それが出来る権能は、**与えられたもの**なのですね。イエス様から。10章1節です。つまり、弟子たちは自分たちが持っている力を発揮するのではなく、**イエス様の中に働いている愛**を受け、そしてその愛ゆえの業をなすようにされているのだと思います。だから弟子たちは自分の力を誇ることは有り得ないのです。「**ただで受けたのですから、ただで与えなさい**」。これが、弟子の派遣の意味ですね。私たちが遣わされるということは、私たちが主人公になることではなくて、あくまで「**遣わされて**」いるということですね。

遣わされた今の私たちは、何か特別なことは出来ないと思います。死人を生き返らせるなんていうことは出来ません。また、直ちにコロナを収束させるなんていうことも私たちには出来ません。けれどもこの箇所でも弟子たちと私たちは同じだと思ふのです。大それたことではない。それはなるべく「空手」になって生きる、ということです。余計なものに頼るな。神様の力は—パウロが言ったように—弱さの内に完全に現れるのですね。そのためにこれまでの生き方でどんどん自分で自分を武装していた格好を脱ぎ捨てていくと言いますか、自分が頼りにするものは神様だけ、イエス様だけになって生きていっていいのだとここで語ってくれていると思います。ですからイエス様は、あなたがたは人々の中に入っていく時にすることは「平和(平安)がありますように」という挨拶なのだというのですね。ちょっと拍子抜けしそうなことです。とてもシンプルなことです。けれども私は、これこそが聖書が語る伝道なのではないかなと思ったのです。

[3] 深く憐れまれる主と共に

その「主に遣わされる」ということに関連して最近とても感動した話があります。それはここからも割と近い、寺井にある、日本ホーリネス教団・川越のぞみ教会の西岡義行先生が、この1月にFEBCの特別番組でお話下さったことです。

「私はそもそも「教会がどうしたら大きくなるか」という発想は聖書的ではないと、考えています。本来、神の民は、「祝福の基」として周りの民を祝福するために、神様から遣わされました。しかし、自分たちの内にその祝福を閉じ込め、異質な存在を排除して「ピュア」な状態にしていくことで、本来の使命を見失ってしまったのです。そういう発想に「そうではない！」と存在を賭けて宣言するためにイエス様が神様から送られて、その十字架と復活によって神様はやり直された。そして、その命を頂いている私たちが教会なのです。」

「私がこの教会に遣わされる一年前、教会で行われた3つの葬儀の内、2つはがんで亡くなられた方でした。そういう中で教会に集い出したがん当事者の方が「次は私かも」と思うようになり、思いを分かち合う「がんカフェ」を教会でもやって欲しいと声を挙げたんです。ところが、なかなか踏み出せなかったんですね、教会も私自身も。丁度その頃、妻が入院しました。隣のベッドの方がうなされていて夜眠れなかったと言うんですが、その方はがんの痛みに耐えておられたのです。妻は、自分のベッドから降りてさすってあげた時に、「ああ、ここに地域の人々の叫びがある」と思ったそうです。そういうことから、この教会でも「がんカフェ」を始めました。そこに一人の女性がいらして、最初は誰とも話したくない雰囲気は漂わせていたのですが、ある時、彼女が「色んな宗教に行ってみた

けれど、ここが最後です」と言われました。その彼女がある教会員と友人になって教会に来るようになり、本当に変えられていったんです。そして、診断結果によってはもう礼拝に来られない可能性があった時、彼女が礼拝が始まる直前に「**すいません、洗礼受けていいですか？**」と聞いてきたんです。「えっ!？」とびっくりしましたが、直ぐに準備して、教会員みんなで祈りの時をもって、その日、洗礼式を行いました。その後、病院で検査をしたら、ステージ3だったのがステージ4に上がってしまいました。しかし、「でもね、その夜、眠れたんです!」って喜んで言うんですよ。元々の明るい性格が戻ってきたんです。「死ぬ前に自分に与えられた使命は、周りを喜ばすことだ」と。そうやって亡くなっていったのですが、ご葬儀の時に、ある看護師の方がご挨拶されました。声に詰まりながら、「こんな患者さんは初めてです。本当に感謝してもし尽くせません。**私たち看護師を支えてくれたのです**」と。彼女は生前、「**がん患者になるとイライラするけど、それをぶつけられるのは、お医者さんでも家族でもなくて、看護師。看護師さんって大変な仕事なのよ**」と言い、看護師さんの悩みを聞いていたんだそうです。それを聞き、私たちは「救いとはこういうことなのだ」と思わされました。…聖書の福音は、説明じゃ届きません。人間の説明などで伝えられるという思い上がりからの悔い改めが必要だと思います。**存在全てが必要なんです**」と語られました。

今日の聖書のこの言葉を思い起こすではありませんか。9章36節でマタイはイエス様のことをこう書いています。—「**(イエスは)また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。**」マタイはどうしてもこれを書きたかった。これは一貫した主の生き方です。私たちに対する神様の深い思いです。これは「胸が千切れるほどに」という様な意味ですね。だから主は私たちを愛し抜かれて十字架にお架かりになったのです。イエス様の伝道が失敗だったなどということはありません。なぜなら**主は今も甦って、私たちと共に生き、働いておられる**からです。

伝道とは主を伝えるとは、**この主の思いに合わせて、私たちも憐みに心が震えることだ**と思います。「この人を見捨てられない。この人と一緒に主の憐みに生きて行きたい。平和がこの人にありますように」と祈ることではないでしょうか。

イエス様は、その「**天の国の収穫**」を見ておられるのです。収穫は多いとおっしゃっているのです。ですからイエス様の伝道は、弟子たち、私たちをも巻き込んでまだ続いているのです!

その「**天の収穫**」への旅の中に私たちは招かれています。主が「一緒に働こう」と言って下さっている。私たちが生きていること、それ自体が伝道です。これは何と幸いなことではないでしょうか! お祈りを致します。